2Ba－4　　既製服のゆとり量とゆとり感覚（第２報）

ー女子短大生の両親の場合ー

大妻女大短大　○布施谷節子　高部啓子

目的：先の女子短大生に引き続き、彼らの両親を対象として同様の調査を行い、既製服のゆとり量やゆとり感覚についての検討を行い、中高年のための衣服設計やサイズ選択のための基礎的資料を得ることを目的とした。

資料・方法：1995年冬と夏に、女子短大生の両親 808名（40～60歳代男女、平均50歳前後）を対象として、質問紙法による調査を行った。調査項目は、父母の年齢と身長、胸囲、胴囲、腰囲、ゆきの身体計測値５項目と、母のブラウス・タイトスカート、父のワイシャツ・ズボンの素材とサイズ及び、胸部、胴部、腰部、ゆき丈、着丈のゆとり量とゆとり感覚の合計44項目である。これらの項目を用いて、単純集計、クロス集計、因子分析によって解析し、女子短大生との比較の上で検討を行った。

結果：①着用サイズについては、母のブラウス・スカートともにMサイズが70％以上を占めるものの、娘と比べるとL、LLが多い。父のワイシャツ・ズボンは、MよりもL、LLの方が多い。父母の胸囲又は胴囲と着用サイズとの相関は娘よりも高い。②ブラウスでは、ゆとり感覚の平均が母は娘より高いものの、ちょうどよいとする胸部のゆとり量は13.8cmであり、娘よりも約4cm少ない。スカートでは、ちょうどよいとする胴部、腰部のゆとり量は母・娘間で差は見られない。しかし、ゆとり感覚では、母はウエストの方がヒップよりゆとり感覚が低く、娘とは逆の傾向である。③父のワイシャツと娘のシャツブラウスとを比較すると、父のワイシャツは娘より胸部・ゆき丈のゆとり量は少なく、また、ゆとり感覚も低い。④因子分析により、父母ともにサイズの不適合を示す因子が抽出された。